

課程博士学位請求論文 審査報告書ならびに審査結果

学位審査委員会：主査	虹林 慶	本学 教授	英文学 博士（文学）
副査	吉井 誠	本学 教授	英語教育学 博士（言語教育）
副査	村尾 治彦	本学 教授	英語学 博士（文学）
副査	長岡 真吾	福岡女子大学教授	米文学 文学修士

課程博士学位請求論文：「Leaving “Reservation of My Mind”—物語を語りなおす Sherman Alexie」

学位申請者：矢ヶ部あかり

（論文要旨）

本研究は、ネイティブ・アメリカン文学の作家であるシャーマン・アレクシーの主要作品を網羅的に扱い、アレクシー文学の持つ特徴を、主にマイノリティーから見たアイデンティティ確立という問題を通して捉え、その普遍的な文学的価値を論じたものである。アレクシーの作品は一方では先住民文学としての特徴を有しており、その価値は歴史的コンテクストにおいて評価されることになる。他方では、アレクシーには現代アメリカ文化の担い手としての側面があり、先住民に限定しない文学的視座を有しているがゆえに多くの読者を獲得している。本研究では、このような二つの特徴を、アレクシーが「語りなおし」のテクニクによって昇華し、創造的なハイブリット文学とも言えるものを達成していることを論じている。

論文の構成は 6 章立てとなっており、第 1 章で先住民文学の系譜および先住民文学におけるアレクシーの位置を確認した後で、時系列的に主要作品について論じる。大きな流れとしては、第 2、3 章でアレクシーの初期作品を扱い、先住民とアメリカ現代社会を巡る様々な問題について分析と議論を行う。次に、第 4、5 章で、これらの問題が「語りなおし」を経てどのように作風の変化をもたらしているのかを、比較的最近の作品を分析することで考察する。最後の 6 章では、この「語りなおし」がさらにどのように発展しているかを、映像作品を論じることで示している。以下、各章について説明する。

第 1 章「アメリカ先住民文学における Sherman Alexie」では、まず先住民文学史について先行研究を参照しながら、3 つの波として分類する。第 1 波（20 世紀初頭からの 70 年間）は欧米の影響を受けた時期、第 2 波（1974 年から 90 年代初期）は白人社会に対立させる形で伝統への回帰を訴えた時期である。アレクシーの属する第 3 波（90 年代以降）はこの二項対立をポストモダニズム的に解決しようとする試みとして、現代アメリカ全体のアイデ

ンティティ問題にマイノリティーの視点から取り組んでいると論じる。個人主義やポップカルチャーを扱うアレクシーは、先住民の伝統文化や保留地に対して両義的な見方をする作家であることを確認する。

第2章「ブルースと語り、そしてアイデンティティ」では、*Reservation Blues*における保留地と伝統文化の問題を論じる。スポケーン族の保留地を突如訪れる、伝説的黒人のブルースマン Robert Johnson が保守的な保留地に異文化をもたらすことで、Thomas, Chess, Checkers の三人が保留地を出て都市へと向かう姿を、先住民のアイデンティティである「語り」が新たな意義と活動の場を得ていく過程として読み解く。筆者は黒人文化であったブルースが多声性や移動性を獲得した歴史と、政治的権力によって保留地に押し込められて因習と抑圧の中に埋没する先住民の語りの歴史を対照させ、先住民が再び主体的にアイデンティティを取り戻すことと新たな語りを獲得することを同一視する。ブルースに反応できない住民たちだが、前述の三人のみはそのような保留地が精神的死をもたらす場と看破し、多文化に満ちた都市において先住民の新たな語りを創造することを期待していることが説明され、最終的にこの作品が都市における先住民のアイデンティティ探求を支持しており、アレクシーの保留地に対する考えを示したものと論じる。

第3章「都市に失われる物語—Sherman Alexie の描く現代の先住民捕囚物語」では、都市の先住民の問題を *Indian Killer* を取り上げ議論する。先住民の 70%が現在都市部に居住している事実を挙げ、それが連邦管理終結政策と先住民都市転住政策に起因していることを論じている。さらに、都市部における経済格差がマイノリティーを貧困化させており、先住民の苦難がこの作品に現れていることを示す。また、この作品が逆捕囚物語（白人が先住民に捉えられ、解放された後に綴る捕囚物語の逆）の系譜に位置付けられることを、先住民文学史より証拠づける。特に主人公の John Smith は 1960 年代の同化政策の一環であるインディアン養子プロジェクトの犠牲者「ロスト・バーズ（迷い鳥）」の一人であるとして、白人にも先住民にもなれないアイデンティティ危機を作品のテーマとして論じる。白人によって育てられた John は、いわば内部と外部から白人の言説によって先住民の声を奪われた状態であり、葛藤の末、先住民の声を偽る自称先住民作家 Wilson の言説を奪おうとするが、最終的に自死する。これを筆者は自らの語り＝生き方を確立できなかった先住民の姿として捉え、その語りの模索をアレクシーの課題として論じる。

第4章「僕が保留地を出るとのこと—*The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* における先住民少年の自己同定」は、水頭症による身体的特徴のため部族社会で差別を受けている少年 Junior が保留地を出る決心をするまでを描くヤング・アダルト小説を扱う。Junior が白人社会の Reardan 高校へ通うきっかけとして筆者は、保留地の教育を同化政策の一環であることを知ったことによるトラウマであるとしている。このトラウマは保留地に居住する部族たちに自己否定観を植え付けるものである。Junior が Reardan において差別を受けながらも、葛藤の末、「尊重」と「共感」を得たことを示しつつ、個人を取り巻くアイデンティティの問題は保留地の内と外とで本質的に変わらないことを論じる。すなわち、共同体から

の抑圧から感じる痛みや孤独、そして個人が持ちうる夢の大きさは人種と無関係であることを本作品は述べているとする。Junior が出自に縛られない自己同定に至ることを描くことで、新たな保留地観あるいは先住民観が表現されているとして、これまでの白人文化との二項対立を崩していることを論証する。さらに *Reservation Blues* との関連を示しつつ、本作品をブルースのような多声性、交差性を持つハイブリッドなものとして結論づけ、アレクシーは本作品の読者に Junior 同様の自己同定を期待するメッセージを込めているとしている。

第5章「Zits から Michael へ—*Flight* における *Indian Killer* への回答」はヤング・アダルト小説 *Flight* を *Indian Killer* が提示した都会の先住民の怒りと孤独の問題への回答として論じる。9.11 以降に書かれた本作品は全般的に戦争と正義についての考察を行っている。15 歳の混血児の孤児 Zits は白人少年 Justice に教唆され、銀行襲撃を行うが、その瞬間、時空の旅を経験する。ヴォネガットの *Slaughterhouse-Five* さながらに、5 人に転生する Zits は異なる時代の復讐の連鎖としての戦いを体験し、個人における正義が組織においては揺らぐことを学ぶ。筆者は銀行襲撃と歴史の旅の体験を 9.11 の正義を考察するための仕掛けとして論じる。最後の転生先は自分を見捨てた自己肯定のできない父親であり、祖父から連なる自己否定の連鎖の歴史が判明する。筆者は復讐の連鎖と自己否定の連鎖が実は暴力という意味で個人と集団（国家）をつなげていると論じる。そして怒りと孤独を誰もが共有する問題として Zits が認識する点に、ハイブリッドな自己同定への兆しを見出す。Zits はそれを自らのトラウマを物語ることで果たし、理想の養父を得て、初めて本名 Michael を名乗る。筆者はこの結末において、アレクシーが *Indian Killer* の問題を解決していると論じ、この物語間の語りなおしのアプローチの有効性を主張している。

第6章「Alexie 作品の進化と「語りなおし」」はこれまで議論してきたアレクシーの語りなおしを総括しつつ、更なる語りなおしの試みを *Smoke Signals* を扱い、論じる。歴史的に先住民文学は、白人によって語られた先住民の姿を語り直す行為であることを確認しつつ、アレクシーの語りなおしの特徴を媒体と文脈の変化において分析する。媒体については、アレクシーが保留地の少年に向けてメッセージを伝えるため、映像とポップカルチャーを用いて、短編小説を映画化することで、これまでの白人視点の先住民の姿ではない、真の姿を表現していると主張する。文脈については、筋の前半と後半で火事、断髪、トラックなどの事象が異なるものを表象するように使われていることを示し、物語が効果的に展開されていることを論証する。この事象の用い方の変化は、父から子への負の連鎖が保留地からの旅によって解消されることを意味しており、最終的な父の受容は明るい未来を示している。このことは最後に歌われる疑問形の詩によって表現されるが、筆者は観客がこれに答えるべきであり、その答えが現実世界におけるさまざまな語りとなると論じる。すなわち、アレクシーの語りなおしは、観客（読者）をも巻き込むダイナミズムを有していると示唆する。

(評価)

本研究はアレクシーの作家としての成長、あるいは作風の変化を作品間の相互作用につ

いて分析するものであり、それを「語りなおし」という技法をもとに総括して論じたものである。歴史的に白人によってゆがめられてきた先住民の姿を取り戻すという企てを意識しつつ、現代アメリカ社会において不可避であるマイノリティーのアイデンティティ確立について積極的なメッセージを発信している作家としてアレクシーを評価する。総じて、先住民文学の可能性を、「語りなおし」という先住民作家側の成長に認めるものとなっている。

これまでのアレクシーに関する研究がしばしば作品別であったり、先住民文化についての政治的見方についてのものであったりするのに対して、本研究はテーマ毎に作品間でどのような語りがなされているかを論じている点で新しさがあり、アレクシーの全体像に迫るだけでなく、アレクシーを現代先住民文学の旗手として捉えた場合、その全体的傾向をも示唆するものとなっていると言えよう。9.11を踏まえた議論としている点についても、新しい視点を提供していると言える。（「語りなおし」が9.11前後の作品間でどのように行われているかに着目し検証することで、指摘される作風の変化の詳細を明らかにし、彼の文学がどのような方向に向かおうとしているのかを提示する。」(12)）

「語りなおし」に着眼しアレクシー文学を論じることは、先住民文学が常に再解釈される対象であることを意味している。すなわち、現代に活躍する作家として、さまざまなアメリカの情勢に反応した結果、「語りなおし」が生じる。その「語りなおし」とは、単に自作品の修正を意味しているのではなく、先住民文学という大きな流れにおける意思表示であり、アメリカ文学というさらに大きな枠組みでのマイノリティーの存在証明でもある。先住民の歴史を背負い、その歴史的な痛みに応じること、それと同時に現代を生き抜くアメリカ人として、ハイブリッドな価値観を主張し、市民権を訴えること、このような大きな問題について試行錯誤する姿が、自作品の「語りなおし」という形で表れているのである。筆者はこういう歴史的、社会的問題を端的に表すのが、9.11を巡る復讐と暴力だと考えている。9.11の前後の作品間で作風が変化することについて、筆者は「そして9.11を経てからは、人種を問わず個人を抑圧し幽閉する共同体やトラウマに、彼は作品という形で言葉を与えてきたのではないだろうか」(106)としているが、それは正鵠を得ていると言える。

以下、本研究で重要と考えられる、保留地、部族、語りについての問題について、どのような考究がなされているかを詳しく確認する。まず、保留地については、歴史的に連邦の管理下にある強制的に先住民を住まわせる土地であり、本来的に先住民の故郷としての役割を十分に果たしていないことを挙げ、雇用の不足と連邦による管理などから生じる貧困と自律性の喪失とをその問題点として論じる。伝統的な先住民文学が主張する保留地の文化と現実のそれとはかけ離れたものであり、先住民が実際に暮らす場が都会へとシフトしていることをアレクシーの作品を例証して挙げた後、保留地が先住民にとって抑圧的な牢獄となっていることを考察する。さらに保留地はあらゆる人種において個人を捕囚し、束縛するメタファーであると結論付ける。この指摘は、都会に移住しても必ずしも先住民が束縛から逃れることができない点と考え合わせると、意義深いものとなっている。結局のところ、個人が主体性を獲得することによってのみしか、保留地は肯定的なものにならないと論じ

る筆者は、人種を超えた個人の自律性をアレクシー文学に見出している。

個人の問題は部族の問題と必然的に関わる。筆者は黒人によるブルースの問題、因習に悩む白人高校生の問題、人種に関わらない正義の問題、などをアレクシーの諸作品で扱いながら、部族の意味について考察する。いわゆる伝統的な意味での部族に対して、アレクシーは「仲間」としての「広義の部族」(69)を対立させていると論じる。同じ志をもつもの、互いに尊重し共感できるものとして部族をとらえるということは、様々な人種が混雑するアメリカにおいて、人種を超えた共同体が可能であることを示唆していると言えるであろう。このような共同体を「壊れた輪」(105)として象徴的にアレクシーが示していることを挙げた上で、個人の自由を認めつつゆるやかに価値観を共有する人々を新たな部族として提案している。そして、このような(特にマイノリティの)個人の自律性を成立させるのが「語り」だと論じている。

「語り」は、主体性を表す声であり、先の「尊重」と「共感」を可能にする手段でもあると説明されている。保留地の保守的な人々が語ることができない一方、変化する社会の中で生き延びようとする意志を持つ者たちは語りを模索する、という故郷に対する姿勢の違いにおいて「語り」の意義が論じられている。さらに、都会に在住する先住民の「語り」の必要性和可能性がアレクシーのメッセージである点を、ネガティブなケース(John Smithの例)、ポジティブなケース(Zitsの例)を挙げながら、分析する。また、登場人物たちの「語り」が先住民文化の未来への継承という点で論じられる一方、先住民作家であるアレクシー自身の「語り」が、いわばメタフィクショナルな形で、作品間の修正においてダイナミックに発展していることが示されている。さらには、このようなフィクショナルな「語り」を語る作家の「語り」が読者の「語り」を喚起していくことも考察される。このように「語り」とは、先住民文化の伝統から続く主体的人生の根幹をなすものとして捉えられ、それが新たな先住民文化(文学)、さらにはアメリカ文化において創造的なハイブリッド性を確立していく可能性について論じられる。それは多文化に満ちた現代アメリカにおけるアイデンティティの模索でもあるとされる。

本研究はこのように先住民文学の諸問題を扱いつつ、現代アメリカの問題にも迫るものであり、今後のアレクシー研究に貢献するものである。あえて課題を挙げるとすれば、アレクシーの作品解釈において有効な議論が、他の先住民作家ではどうなのか、比較されていない点であろう。また、「語りなおし」についても、アメリカ文学の伝統の中でどのような例があり、アレクシーの場合はどのように異なっているのかなどについての考察があってもよい。ただし、本研究はアレクシー作品に的を絞り、全体像をとらえようとするものであるため、これらの点が不足していても、完成度を低くするものではない。これらの点は今後の研究課題とすることが可能であろう。

結論として、ここの学位審査委員会は、審査対象となる論文が、

1. シャーマン・アレクシーの諸作品を「語りなおし」という独自の視点で体系的に論じることで、現代アメリカ文化における先住民文学の現状と可能性を鮮やかに提示して

いること（独自性・新見性）

2. 本研究に必要な先行研究が言及されており、明快な論理で作品分析および考究が示されていること（論理的・分析的）
3. 本研究で明らかにされたアレクシー作品に対する知見が、今後のアレクシー研究に寄与するものであること、および学界における評価に値する体系的研究であることの点から、「大学院文学研究科博士後期課程・ディプロマポリシー」に合致するものであり、「文学研究科英語英米文学専攻博士後期課程学位申請論文における審査および学位授与の決定にかかる基準について」の審査基準を満たしており、博士（文学）の学位授与が適当であると判断する。